

# 研修生に教えていること・望むこと 藤本吉利



私が研修生に教えているのは、主に屋台囃子と大太鼓である。今年、まずパチ(縮太鼓用)を作るところから関わった。屋台囃子と大太鼓は鬼太鼓座時代から演奏している鼓童の代表的演目だ。三十年以上叩きつづけてきたことを、自分の身をもって研修生に伝えている。しかし、伝えるということは、そう簡単なことではない。教わる側の本人が、教わったこ

とを、汗水流して取り組んでこそ、自分のものになって行くのである。こだわりを持って、愛情を持って、情熱を持って、とことん突き詰める、研究心が必要である。私が研修生を教える中で言っている言葉。太鼓の音は言葉と一緒にメッセージなんだ。一音一音が意味を持つ、なくてはならない大事な音である。大きい音、小さい音、すべての音に気持ちが届められてこそ、メッセージとして伝わる。気持ちを込めるといことは、下っ腹に気を入れること、気合い。そして自分が出した音の中に、自分自身が入り込む、音に酔う、音と一体化すること。太鼓は手先で打つのではなく、全身で打つ。そのためには下半身、足腰、踏ん張りが大事。美しいフォーム、自然体であることが大事。などなど、書き出すときりがない。研修生は実に沢山のことを学んでいる。太鼓、唄、踊り、笛、能、狂言、茶道、農業、造形、講義、佐渡の祭り、魚のおろし方、ランニング、などなど。色々あって大変だとも思える。色々あって楽しい、嬉しい、幸せだとも思える。つらくて苦しいことも、もちろんあるでしょう。研修期間の二年間を、いかに過ごすかは本人次第。鼓童の舞台メンバーやスタッフを目指している人、また研修所での体験そのものを求めてくる人、それぞれが志を持ってやって来ている。共に共同生活をして学ぶ

同期の仲間。お互いに切磋琢磨し、励まし合い頑張ってもらいたい。毎年一月に研修所の修了式が行われ、準メンバーに選ばれる人と、研修所を離れて行く人に別れる。今の時期、鼓童メンバーを目指している人は、大変な不安を抱えていることと思う。そんな不安に負けないで、自分が目指した目標に向かって、最後まで頑張ってもらいたい。そう出来たら、たとえ準メンバーに選ばれなかったとしても、いいではないか。それは、つらいことだと思えけれど、結果としてしっかり受け止める強さを持ってほしい。研修所で学んだことは、決して無駄になったりはしない。共に暮らし、共に太鼓を叩き過ぎたなかで、人と人が互いに支え合っていて生きて行くことの大切さ、素晴らしさをなによりも学び取ってもらいたい。研修所は人間修行の場でもあるのだ。最後に研修生に一言。レスリングの浜口の親父さんの言葉を借りて、「気合いだ！ 気合いだ！ 気合いだ！ 気合いだ！ 気合いだ！ 気合いだ！」それから、もう一つ。鬼太鼓座時代、お世話になった日本刺繍の故・斉藤馨さんから頂いた、お手紙にあった言葉。「魂が喜びに満たされたいなら、道はしぜんに開かれます。」

二〇〇六年十一月二十二日  
自称熱血講師の吉利より愛を込めて。